

〔研究ノート〕

『フランケンシュタイン』—時間と読書と創造と

原 田 俊 明

Mary Shelley (1797-1851) の長篇小説『フランケンシュタイン』(*Frankenstein; or The Modern Prometheus*, 1818; 1823; 1831) は, Robert Walton と Victor Frankenstein と the Creature¹ という3者の語り手を持つ, 複雑な三重の入れ子構造と相俟って, なかなか手ごわい作品である。読者は読みの過程で様々な謎に直面する。今回の小論では時間, 読書, 創造という三題嚆を取り上げる。

1) 時間標識

まず, 物語が起こったのは, 実際いつのことなのだろうか。そこで我々読者が頼りにするのは, 小説冒頭で Robert Walton 船長が実姉 Mrs. Margaret Saville² に宛てて書く一連の手紙である。

日付は出鼻から Dec. 11th, 17- (17xx 年 12 月 11 日) という具合に謎めいて (p. 15)³, 1700 年代のいったい何年のことなのか意図的に伏せられている。Walton が実姉に対して年号を隠さねばならぬ理由は特になさそうなので, これは書簡を公けにするに際して為された隠し事と考えて差し支えなからう。

フランスの Jean-Jacques Lecercle (1988) は, その著書⁴の中で, 物語が 1790 年代に設定されていることを看破した。その鮮やかなお手並みは廣野由美子『批評理論入門』(p. 56) でも紹介されているが, ここでは多少語句を変えて列挙する。

1) 第 15 章で, the Creature は 1774 年に刊行された Goethe の『若きウェルテルの悩み』を読んでいるため, これより前に物語が設定されていることはありえない。

2) Victor Frankenstein が第 19 章で女性版 creature を造るべくスコットランドへ向かう途中, オックスフォードに立ち寄った際に,

As we entered this city, our minds were filled with the remembrance of the events that had been transacted there more than a century and a half before. It was here that Charles I. had collected his forces. (p. 159)

という清教徒革命 (Puritan Revolution) への言及がある。

イングランド内戦 (English Civil War) に於いて, King Charles I の軍勢による大本営は, 第一次イングランド内戦 (The First English Civil War) の大部分, すなわち 1642 年 10 月下旬から 46 年 5 月までオックスフォードに存在した。国王がオックスフォードで兵力を結集した (Charles I. had collected his forces) 頃から数えて 150 年超 (more than a century and a half) が経過したとあれば,

1642+150 で単純計算して割り出される数字は 1792 年となる。しかし英語の 'more than' は日本語の「～以上」と異なりその数字を含めてはならないので、Frankenstein とその親友 Clerval がオックスフォードに着いたのは 1793 年以降と考えられる。

では、Frankenstein が北極で Walton 船長の船に救い上げられたのは何年のことだろうか。舞台を 1790 年代に限定したので、年号の特定はもはや容易な作業である。Walton による第 4 の手紙 (Letter IV) の第 2 段落冒頭 (p. 23)⁵ に重大なヒントがある。

Last Monday (July 31st), we were nearly surrounded by ice, ...

という括弧付きのくだりである。これは恰も作者が年号を特定してくださいと読者に呼びかけているかのような括弧である。現在インターネット上には「曜日検索」なる便利なサイトがいくつもある。これを使えば年号を簡単に特定できる。複数のサイトで調べたところ、1790 年代で 7 月 31 日が月曜日になるのは 1797 年を措いて他にない⁶。この事実はウィキペディア英語版の Common year starting on Sunday⁷ でも確認できた。つまり Walton の一連の手紙は 1796 年 12 月 11 日 (日) に書き始められ、翌 97 年 9 月 12 日 (火) に終わっている。

さて、これは何を意味するのか。伝記的事実を繙けば、作者 Mary Shelley の母親 Mary Wollstonecraft (1759-97) はこの間、より具体的には結婚前の 1796 年 12 月 7 日 (水)⁸、またはその前後に William Godwin (1756-1836) との間に第一子を受胎し、翌 97 年 3 月 29 日 (水) に 2 人は正式に結婚し、同年 8 月 30 日 (水) に第一子 Mary をもうけたが、同年 9 月 10 日 (日) に母親は産褥熱で命を落とした。したがって Walton の手紙が書かれた時期は、作者 Mary Shelley 自身が母親の胎内で受精するところから、その分娩と、その母親の死までの時期とほぼ重なっている。上記の時期の符合については、残念ながら既に Anne K. Mellor (2003)⁹ が指摘しているので、拙稿による世紀の大発見には至らなかったが、なるほど興味深い符合ではある。恰も作者 Mary の誕生は一個の「怪物」の誕生と言わんばかりの過剰な自意識だ。しかしながら the Creature は Victor Frankenstein によってその数年前に生を受けていることを考えれば、「Mary Shelley, すなわち the Creature」とするのは短絡的に過ぎよう。

2) The Creature の読書

時間標識に関して、上で Johann Wolfgang von Goethe (1749-1832) の書簡体小説『若きウェルテルの悩み』(*Die Leiden des jungen Werthers*, 1774) に言及した。これは the Creature が第 15 章に於いてフランス語¹⁰で読んだと Frankenstein に語る 3 種の書籍のうちの 1 冊である。原書刊行の 2 年後の 1776 年にはドイツ貴族 S. de Seckendorf (Baron Theresius Joseph Carl Sigismund Ludwig von Seckendorf) によるフランス語訳が *Les souffrances du Jeune Werther* の題名¹¹で出た。同年に Georges Deyverdun によって 2 つ目のフランス語訳が出た際の題名は単純に *Werther* となっている¹²。この二番煎じの翻訳は、10 年後の 1786 年にも第 3 刷が出ているところを見ると、きっと評判が良かったのだろう。1790 年代に the Creature が偶然手にした版も、もしかすると Deyverdun 訳の第 3 刷だったのかも知れない。

The Creature の口から出てくる順序とは前後してしまうが、自分で読んだ書籍の他に、彼は第 13

章で、De Lacey 家で Felix が Safie に Volney こと Constantin-François Chassebœuf de La Girandais, comte de Volney または Constantin François de Chassebœuf, comte de Volney (1757-1820) の『諸帝国の没落』(*Les Ruines, ou Méditations sur les révolutions des empires*, 1791)¹³ を読み聞かせるのを盗み聞く。The Creature はいわば現代の talking book のような形態を通して、人間の歴史の概要に触れ、同時にこの世の人間の美德と、その対極にある人間の悪徳や残虐性について知り、心乱れるのである。ちなみにこの書籍だけ原書がフランス語である。当時の知識人の間で話題になった本だが、Felix のおかげで the Creature は刊行されて間もないその本の内容を知ることができたのである。

先ほど筆者は the Creature が 3 つの書物を読んだと述べたが、残りの 2 点のうちの 1 点は西暦 100 年頃書かれた、(フランス風に表記すれば) Plutarque¹⁴ (c. AD 46-127) による『プルターク英雄伝』¹⁵ である。これについては、the Creature がいつ頃のフランス語訳を手にとったのか不明であるが、the Creature が生まれる以前からフランス語訳が刊行されていたことは確かである。

もう 1 つの著作は John Milton (1608-74) の一大叙事詩『失樂園』(*Paradise Lost*, 1667 & 1674) である。The Creature が手にしたのは、1729 年の N. F. Dupré de Saint-Maur の訳か、1754-55 年の Louis Racine¹⁶ の訳か、1775 年の Le Roy 神父による訳か、はたまた 1788 年に第 2 版が出た Jean Batiste Mosneron Delaunay による訳¹⁷だろうか。上に挙げた 1729 年の Saint-Maur の訳は革命期の 1792 年になっても版を重ねている点からすると、the Creature が手にしたのは、或いはこれだったのかも知れない¹⁸。題名はどれも *Le Paradis Perdu* または *Le Paradis perdu* または *Le paradis perdu* である。他に訳しようもなからう。

ところで『失樂園』のフランス語訳を初めて手がけたのは誰だろうフランス貴族の政治家にして大作家の François-René de Chateaubriand (1768-1848) であるとする説を提唱する者もいるようだが、これは事実とは異なる。Chateaubriand はフランス革命戦争の混乱期の 1792-1800 年にロンドンに亡命していた折、英文学に親しみ、『失樂園』のフランス語訳に取りかかっている。長大な作品なるがゆえ、また、Chateaubriand の政治活動が 1800 年以降、再び忙しくなったのが災いして、その刊行は 1836 年まで待たねばならない。

Milton の『失樂園』は小説『フランケンシュタイン』のあちらこちらで言及されたり、仄めかされているが、怪物がこの地上に存在していた 1790 年代の時点で、Chateaubriand 版『失樂園』は少なくとも書物の形では存在しなかったのである。

3) 親友 Clerval の読書

次に Victor Frankenstein の親友 Henry Clerval の少年時代の読書について考えてみよう。1831 年の第 3 版第 2 章では、

He (Clerval) tried to make us (Victor and Elizabeth) act plays, and to enter into masquerades, in which the characters were drawn from heroes of Roncesvalles, of the Round Table of King Arthur, and the chivalrous train who shed their blood to redeem the holy sepulchre from the hands of the infidels. (p. 37, 文中の括弧は筆者)

とあるが、heroes of Roncesvalles はともかくとして、アーサー王の円卓の騎士はいささか英国的に過ぎないかという憾はある。遡ること 1818 年の初版では、

... we (Clerval and Victor) used to act plays composed by him (Clerval) out of these favourite books, the principal characters of which were Orlando, Robin Hood, Amadis, and St George. (p. 21, 文中の括弧は筆者)

とある。これについては注釈者の Marilyn Butler も呆れたと見え、‘There is nothing Genevan about this list.’ と言いつけている¹⁹。Frankenstein が Walton に語る少年時代の思い出は、まるで当時のイングランド中産階級の者が心に抱くような思い出のようである。この点に関しては、孤独なイングランド人 Walton が船上で妄想して作りあげた虚偽の話であることのような気がしてならない。

4) 人造人間創造の謎

男性だけによる（いわば女性の存在を否定した）人間創造²⁰、或いは一種の出産・生殖（procreation）の神話や伝説は西洋世界にいくつかある。

ギリシア神話では Hephaestus（ヘーパイストス）がクレタ島で青銅から巨人 Talus（タロス）をつくり、水と土くれで Pandora（パンドーラ）をつくった。キプロス島の彫刻家 Pygmalion（ピュグマリオン）は象牙から女性 Galatea（ガラテア）をつくり、恋に落ちた。愛と美の女神アプロディーテー（Aphrodite）に祈りを捧げると女神は彫刻家を憐れみ、Galatea に生命を吹き込んだとされる。

ユダヤ教には、Golem（ゴーレム）の伝承がある。Golem とはヘブライ語の gelem（原料）に由来し、伝承では自動泥人形を指す。つくった主人の命令だけを忠実に実行する召し使いという点では、さしずめ SF 小説や映画などに登場するロボットを先取りしたような存在である。運用上厳格な制約が数多くあり、それらを守らないと狂暴化するとされる。ラビ（律法学者）が断食や祈禱などの神聖な儀式を行なった後、土を捏ねて人形を作る。呪文を唱え、emeth（真理）というヘブライ文字を書いた羊皮紙を人形の額に貼り付けることで完成する。ゴーレムを壊すときには、emeth の e の一文字を消し、meth（死）にすればよいとされる。

『旧約聖書』の「創世記」では、人類最初の男 Adam も唯一絶対の神 Yahweh（ヤハウェ；YHWH, YHVH, JHWH or JHVH）によって、土（ヘブライ語で「アダマー」）に鼻からルーアハ（ruah; Holy Spirit or Holy Ghost; 聖霊）を吹き込まれたことから、Adam もまた Golem であった可能性がある。そして Yahweh は Adam の肋骨から人類最初の女 Eve をつくった。

13 世紀には神学者で魔法使いの Albertus Magnus (1193-1280) が、人の質問に答えることができる真鍮製の頭 (brazen head)²¹ をつくったとされるが、骨と肉でつくったのではないかという伝説まで生まれている。16 世紀になると医者で錬金術師の Paracelsus (Theophrastus Bombastus von Hohenheim, 1493-1541) が女性の受胎能力を病的なまでにからかい、自らの精子を馬糞の肥溜めの中で 40 週間培養することで、こびと homunculus（ホムンクルス）をつくったとされる。

そうなると小説『フランケンシュタイン』に於ける the Creature は、泥の代わりに人間の死体を素材としてつくった Golem という解釈もできるだろう。Victor はその Creature に愛情を注ぐこと

や、それどころか名を与えることを拒否し、保護監督や養育や教育を放棄してそのまま部屋に放置したという点では、現代の児童虐待にも相通じるものがある。また、一度は約束した女性版人造人間をつくる作業をあと一步のところで中止して、the Creature を激怒させた。Victor はこれら数々の禁じ手を行なったがために、the Creature は凶暴化したのである。まさに 18 世紀版 Golem である。

しかし Victor Frankenstein が第 4 章で漠然と遠まわしに Walton に語る

'I collected bones from charnel-houses; and disturbed, with profane fingers, the tremendous secrets of the human frame.' (pp. 54-55)

の文中の「人体のとてつもない秘密」とはいったい何だろうか。Victor が南ドイツのインゴルシュタット大学入学前に故郷ジュネーヴで読み耽っていたのは、Cornelius Agrippa (1486-1535) と上記の Albertus Magnus と Paracelsus だった。特に Paracelsus の影響ということで考えれば、Victor は necrophilia (屍姦) に耽っていたのではないだろうか。「瀆神的な指で」という表現や

... I kept my workshop of filthy creation ... (p. 55)

という箇所に見られる「穢れた創造」なる表現。それに

I then thought that my father would be unjust if he ascribed my neglect to vice ... but ... I should not be altogether free from blame. (*Ibid.*)

という箇所からも、Victor が何か性的に非常に穢れた行ないをしていたことが分かる。英語の vice という単語は「不徳・悪徳」を表すが、しばしば性的な逸脱や不道德行為を示唆するものである。そうならば Victor は単に人造人間をつくる試みに心を砕いているだけでなく、生身の女性である許婚の Elizabeth Lavenza との婚姻や性交を意図的に避け、人間の死体で代理的な性行為を行なうことで、死体に新たな生命を孕ませようとしたのではなかろうか²²。この第 4 章の Victor の語り口はあまりにも曖昧模糊としていて、掘み処がないが、敢えてひとつの解釈を示せば上記のようになる。その屍姦の結果として、かの Creature が生まれたのかどうかは分からない。が、人間の生と死、性と生殖に関して大いなる不気味さを残したことは確かである。

註

- 1 創造主 Victor Frankenstein は、これを 'the wretch', 'the fiend', 'the daemon', 'the enemy' などと感情的な詞で呼び続ける一方、日本の識者たちはこれを「怪物」と呼ぶことが多い。しかし筆者は拙稿ではなるべく中立的な立場を採るべく、「創造物」を表す 'the Creature' と、これと呼ぶことにする。
- 2 或いは実妹か、英語の原文 sister からは窺い知ることができないが、邦訳では「姉」とするのが通例になっている。
- 3 『フランケンシュタイン』の引用は特に断りが無い限り、1831 年の第 3 版に基く M. K. Joseph 編の Oxford World's Classics 版による。
- 4 Jean-Jacques Lecercle, *Frankenstein, mythe et philosophie*. Paris: Presses Universitaires de France, 1988.
- 5 初版の 1818 Text に基づく Oxford 版では p. 12。
- 6 余談だが、近年では 2006 年がそうだった。

- 7 http://en.wikipedia.org/wiki/Common_year_starting_on_Sunday
- 8 受精後 266 日 (38 週) で出産に至ると仮定した場合。
- 9 Anne K. Mellor, 'Making a "Monster": an Introduction to Frankenstein' in Esther Schor (ed.). *The Cambridge Companion to Mary Shelley*. Cambridge: Cambridge University Press, 2003.
- 10 Fortunately the books were written in the language, the elements of which I had acquired at the cottage; ... (p. 127) とあるので、De Lacey 家の小屋の中を覗き見て基礎を身につけた言語ということになり、フランス語以外には考えられない。
- 11 今日一般に出回っているフランス語訳 *Les Souffrances du jeune Werther* とは大文字と小文字の使い分けが若干異なっている。
- 12 *Antiquarian Booksellers' Association of America*, <http://search.abaa.org/> による。
- 13 原題を直訳すれば『滅亡、或いは諸帝国の革命に関する省察』。
- 14 英語では Plutarch, ラテン語表記で Mestrius Plutarchus, ギリシア語表記で Πλούταρχος (Ploutarkhos)。
- 15 ギリシア語で *Βίοι Παράλληλοι* (*Bíoi Parállēloi*)。フランス語訳は *Vies parallèles des hommes illustres*。
- 16 フランスの大劇作家 Jean Racine (1639-99) の息子。
- 17 初版の刊行年は残念ながら調べがつかない。
- 18 *The British Library Integrated Catalogue*, <http://catalogue.bl.uk/> による。
- 19 'Notes' in Mary Shelley, *Frankenstein; or The Modern Prometheus 1818 Text*. Marilyn Butler (ed.). Oxford: Oxford University Press, 1998, p. 254.
- 20 余談になるが、筆者の所属する学科が、2006 年 4 月に人間文化学科から文化創造学科にその名を変えたのは興味深い。「文化」という用語を軸にして「人間」が「創造」に取って変わったわけである。何かフランケンシュタイン的な意図を感じるのには筆者の深読みだろうか。
- 21 ここで head というからには、首 (neck) から上の部分を指すのであり、毛髪の生えている部分のみではない。
- 22 尤も一般的には精子ではなく電流とされているが。

参考資料

- 1 *Antiquarian Booksellers' Association of America*. <http://search.abaa.org/>
- 2 Bloom, Clive (ed.). *Gothic Horror 2nd Edition*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2007.
- 3 *British Library Integrated Catalogue, The*. <http://catalogue.bl.uk/>
- 4 Byron, Glennis. *Frankenstein York Notes Advanced*. London: York Press, 2004.
- 5 *Copac academic and national library catalogue*. <http://copac.ac.uk>
- 6 Helman, Cecil. *The Body of Frankenstein's Monster: Essays in Myth and Medicine*. New York: W. W. Norton, 1992.
- 7 Knowles, Lizzie. 'Reading Agency from Feminist Perspective through Frankenstein and "The Bloody Chamber"'. in *Sheffield Hallam University Working Papers*. <http://extra.shu.ac.uk/wpw/femprac/knowles.htm#i>
- 8 Lecercle, Jean-Jacques. J=J・ルセルクル『現代思想で読むフランケンシュタイン』今村仁司, 澤里岳史訳. Tokyo: 講談社, 1997 (原著は 1988).
- 9 Mellor, Anne K. *Mary Shelley: Her Life, Her Fiction, Her Monsters*. New York: Routledge, 1989.
- 10 NNDB. <http://www.nndb.com/>
- 11 Schor, Esther (ed.). *The Cambridge Companion to Mary Shelley*. Cambridge: Cambridge University Press, 2003.

- 12 Shelley, Mary. *Frankenstein; or The Modern Prometheus*. Maurice Hindle (ed.). Harmondsworth: Penguin Books, 1992 (1831 年版).
- 13 ———. *Frankenstein; or The Modern Prometheus*. M. K. Joseph (ed.). Oxford: Oxford University Press, 1998 (1831 年版).
- 14 ———. *Frankenstein; or The Modern Prometheus 1818 Text*. Marilyn Butler (ed.). Oxford: Oxford University Press, 1998 (1818 年版).
- 15 ———. *Shelley's Frankenstein*. Stephen C. Behrendt (ed.). New York: Hungry Minds, 2001 (1831 年版).
- 16 ———. メアリ・シェリー『フランケンシュタイン』森下弓子訳. Tokyo: 東京創元社創元推理文庫, 1984.
- 17 Spark, Muriel. *Mary Shelley*. London: Penguin Books, 2002 (Copyright 1987).
- 18 Vacquin, Monette. モネット・ヴァカン『メアリー・シェリーとフランケンシュタイン』辻由美訳. Tokyo: パピルス, 1991 (原著は1989).
- 19 Wikipedia. <http://en.wikipedia.org/> & <http://de.wikipedia.org/> & <http://fr.wikipedia.org/> & <http://ja.wikipedia.org/>
- 20 幻冬舎曜日検索. <http://www.gentosha-comics.net/youbi/>
- 21 誕生曜日検索機. <http://nagano.cool.ne.jp/bkk0929/b/b.htm>
- 22 久守和子, 中川僚子 (編著)『シリーズ もっと知りたい世界の名作7 フランケンシュタイン』Kyoto: ミネルヴァ書房, 2006.
- 23 廣野由美子『批評理論入門』Tokyo: 中央公論新社中公新書, 2005.

(はらだ としあき 文化創造学科)